



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2020年11月30日

AJEL

No. 133

1. 理事会報告
 - 第166回理事会
2. 第42回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ
3. 研究部会開催案内
4. 第25期日本学術会議会員の任命拒否問題について
5. 新刊書紹介
6. 寄稿：コロナ禍での現地滞在記
7. 事務局から

1. 理事会報告

○第166回議事録

開催日時：2020年10月18日（日）13～16時

開催形式：Zoomによるオンライン会議

出席者：受田宏之、武田和久、近田亮平、大串和雄、伏見岳志（書記）、舩方周一郎、大越翼、小林貴徳、藤掛洋子、柴田修子、岸川毅、牛田千鶴、渡部森哉、鈴木紀、禪野美帆、石田智恵、新木秀和

欠席者：柳原孝敦、狐崎知己

〈報告事項〉

1. 『会報』第132号刊行と第133号の編集状況
 - 伏見理事より、『会報』第132号が8月31日付けで発行されたことと、第133号

の編集状況について報告があった。

受田理事長より、会報向けにコロナ禍での現地滞在記を2名の若手会員に執筆依頼していることが報告された。

会報の「会費納入のお願い」の文面は、前号から修正する必要があることが指摘された。

2. 『年報』第41号の編集状況について
 - 舩方理事より、『年報』第41号の編集状況について報告があった。現時点では、数件の投稿が見込まれるものの、十分とはいえない。
3. 地域研究部会について

各担当理事より、地域研究部会の開催予定について報告があった。東日本については、12月12日に開催予定。現時点で、パネル1件と個人発表1件の申し込みがある。中部部会は12月20日に開催予定。報告申し込み期限は11月6日で、現時点では申請なし。申請者がいない場合、今年の3月の部会での発表予定者に報告していただくことを検討する。西日本部会は、もともと11月7日に開催を予定していたが、報告希望者が1名しかいなかった。そのため、12月19日に変更し、今年度の定期大会で発表予定だった1名の報告者に加え、それぞれに対する討論者による部会を開催する。

4. 会計
 - 近田理事より、証憑の電子化およびゆうちょ銀行の総合口座解約について報告があった。

証憑については、署名したうえで電子データ化したものを、会計が受け取り、長期的に保存する。オリジナルは、提出者が年度が終了し、大会で決算が承認されるまで保存する。この方針を理事会として承認した。

ゆうちょ銀行の総合口座の解約：今年の総会ではゆうちょ銀行に定額預金があると報告したが、定額預金は2018年に満期を迎え、通常貯金になっていたことが判明した。銀行口座が複数あると引き継ぎや会計監査の手続きが煩雑になることに加え、銀行取引に関して任意団体であったとしても学会が法人格として扱われ、年々利用が困難になっている。そのため、これを機会に定額貯金と通常貯金を含む総合口座を解約し、会計理事名義で作成した会計口座へ資金を移動して運用などを行う。なお、この口座は、会費振込用の事務局管理の口座とは異なる。理事会として以上の方針について承認した。

5. 事務局より

武田理事より、今年度の会費納入の受付を開始したことが報告された。

6. ウェブサイト・ニュース配信

石田理事より、ウェブサイトの必要事項を更新したこととニュース配信の状況について報告があった。

7. 学術・国際交流について

新木理事より、例年のようにJCASA（地域研究コンソーシアム）年次集会およびJCAS（地域研究学会連絡協議会）年次総会が開催される場合、出席を予定していることが、報告された。

8. その他 なし

〈審議事項〉

1. 第42回定期大会の準備状況

定期大会実行委員長の藤掛理事および実行委員の小林理事・大越理事より、第42回定期大会の準備状況について報告があった。

実行委員会では準備会合を5回開催した。大会はオンライン開催の予定である。開催日は来年6月5・6日、又は12・13日を予定しており、基調講演者と相談して決定する（*その後、6月5・6日に決定）。実行委員メンバーの増員については、実行委員長の権限で決定する。以上が承認された。

予算について：オンライン開催のため、オンラインの運営を外部業者（創文印刷工業）に委託することが報告され、承認された。また、現在の委託ではZoomの参加人数上限が100名に設定されているが、実行委員会の判断で上方修正できることも承認された。

非会員のパネル報告・一般参加について：非会員の参加については、例年は参加費を徴収していたが、今大会では徴収しないことが、承認された。これは、オンライン化にともなう手続きや個人情報の取扱の煩雑さを考慮したためである。

中止された今年度大会の発表予定者の優先について：今年度大会で発表を予定していた人については、42回大会では優先的に申し込みを受け付ける。これらの発表予定者は、すでに審査を経て発表が認められ、多くが報告要旨も事前に提出しているためである。これらの発表予定者を受け入れた場合、大会セッションを増設することを、理事会として承認した。増設され予算面で不足が出た場合は、企画費を用いる点に問題がないことを、会計担当理事が確認した。

ペーパーの事前提出について：ペー

パーを電子的に配布すると拡散する恐れがあるため、今回は事前提出を中止する提案があった。しかし、ペーパーの提出は他学会の趨勢であり、電子的な事前配布も一般化していること、提出なしには報告の質的向上や投稿数の増加が期待できないことから、ペーパー提出は必要と理事会で決議した。ペーパー提出の形式はこれまで同様に問わないこと、ペーパー配布のセキュリティ的な配慮については、実行委員会で検討することを理事会として承認した。

定期大会用ポータル作成ならびに維持にかかる費用について：大会ポータルの作成や運営にかかる費用は、本学会のインフラ整備費用である。ポータル使用は1回限りではなく、今後の定期大会でも持続的に利用するようにする。これにあたり、ポータル作成費用は大会開催費用ではなく、学会運営費から支出することを、理事会として承認した。

懇親会について：大会ではオンラインの懇親会も開催することを承認した。Zoomのブレイクアウトセッションの利用を想定しており、具体的な運用については大会実行委員会で検討していく。

基調講演とシンポジウムについて：基調講演はMaxine Molyneux氏を予定しており、日程は調整中であること、シンポジウムは「GenderとCOVID19」というテーマで、報告者とコメンテーターを調整していることが報告され、承認された。非会員の参加促進のため、シンポジウムには魅力的なタイトルが必要との意見が出された。また、基調講演とシンポジウムの内容を『年報』42号へ投稿することが提案され、

承認された。

2. 入退会の承認

武田理事より、1名のシニア会員への資格変更と6名の退会申請があったことが報告され、申請書を回覧した後、承認した。

【注記】なお、後日メール審議で2名の入会を追加承認した。いずれも、理事会開催日以前に入会申請がなされたが、事務上の事情で、今回の理事会では審議が間に合わなかったためである。

3. 若手支援制度について なし

4. 第25期日本学術会議会員の任命について

受田理事長より、第25期日本学術会議会員の任命に対するJCASAの抗議声明に学会として名を連ねることの提案があり、承認した。また、学会として別途、声明を出すことも提案され、声明案が承認された。なお、声明は内閣総理大臣宛てに送付すること、文面については送付した旨を追記したうえで学会ニュースで配信し、ホームページに掲載すること、会報には速報性はないが学会の活動記録の目的で掲載することが決議された。

5. 理事選挙に関わる規定について

受田理事長より、理事選挙の規定について報告があった。現在は、地域ブロックを代表する理事の選出が必要な場合に、選出を担当するのが選挙管理委員会なのか、理事会なのか、規程に齟齬がある。選出担当は次期理事長・理事選考委員会とし、これにしたがって文面も改定することにすることが承認された。

6. 『年報』41号の原稿確保について

舩方理事より、近年は投稿数が少ない上にコロナ禍でもあり、原稿を確保できるか不透明なため、中止になった

今年度大会の基調講演予定者に原稿を打診し、回答があったことが報告された。しかし、提案された原稿は十分にオリジナルなものでないため、原稿依頼はおこなわないことを決議した。

7. コロナ関連企画について

受田理事長より、『年報』42号ではコロナ関連の特集を組む予定であり、そのために投稿、依頼原稿とも早くから動く必要のあることが報告された。

8. その他

定期大会の総会委任状について：小林理事から、定期大会総会の参加および委任状の収集についてはGoogleフォームの活用を考えていることが報告され、承認された。ただし、電子的手段を利用できない会員のために、オンライン以外の手段（メールリストに参加していない会員へは郵送する、など）も、大会実行委員会で検討すること、大会参加登録用のGoogleフォームに総会委任状を含めると、大会に参加しない会員から委任状が集まらないという懸念があるので、Googleフォームを分けるなど大会実行委員会で対策を検討することもあわせて決議された。

定期大会総会について：小林担当理事より、定期大会総会については、Zoomでの開催を検討することが報告された。ただし、Zoomが利用できない会員の参加についても、大会実行委員会で対応策を検討する。なお、総会をZoom開催するには、セッション参加人数の上限引き上げが必要であることが、確認された。

定期大会時の理事会開催について：新木理事の問題提起を受け、大会時に理事会は開催せず、別日程で開催することが承認された。オンライン開催のため、大会時にその場で理事が揃って

いることを前提にして理事会を開催する妥当性が弱まったためである。

次回の理事会の日程について：2021年1月24日（日）13時から開催予定である。

2. 第42回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ

第42回定期大会は、2021年6月5日（土）および6日（日）の2日間、ウェブ会議ツール（Zoom）を用いたオンライン形式で、横浜国立大学を主催校として開催します。今大会では、University College London, Institute of the AmericasのMaxine Molyneux先生による記念講演「Gender and Globalization in Latin-America (仮)」と、シンポジウム「リスクとジェンダー：新型コロナウイルス感染症と社会的マイノリティ (仮)」を企画しています。また、1日目の総会終了後「バーチャル懇親会」を行う予定です。第42回定期大会の詳細は12月にメール配信にてお知らせします。会員の皆さまにおかれましてはご予定を調整頂ければ幸いです。みなさまのご参加をお待ちしております。一般参加、報告をご希望の方は、2021年1月6日（水）までに、必要事項を下記の要領でお申し込みください。

1. 大会一般参加申し込み（オンライン開催に伴う重要な変更点）

今回は、Zoomを用いる本学会初めてのオンライン開催となります。大会運営、システム管理をより簡便かつ正確にするため、一般参加者、個別研究報告、パネル、ポスター発表、懇親会参加の申し込みをGoogle Formsの書式を用いて一元化することにしました。発表を希望される方、参加を希望される方は、学会ウェブサイト掲載の「定期大会」ポータルに入り、「第42回定期大会」から「参加申込フォーム」を

開き、必要事項を記入した上で「送信」をクリックして下さい。この申込書には、必要事項をもれなくご記入いただきますようお願いいたします。

また今次大会では、記念講演とシンポジウムに関してはZoomウェビナーを用いてストリーミング配信いたします。録画された動画ファイルは大会ポータル上で期間限定にて公開予定です。一方、分科会、パネル発表に関しては、次回定期大会開催の技術的な参考とするためにZoom上にて録画させていただきます。録画されたものは今年度および来年度の大会運営・企画委員のみが参照できるものとしますが、肖像権に基づき録画されることを望まない会員は、Google Formsにて申し込みをされる際に当該欄に印を付してください。

参加申し込みを受け付けたのち、実行委員会よりZoom IDとパスワードをお送りします。皆様は学会ウェブサイトの定期大会ポータル掲載の「第42回定期大会プログラム」にアクセスし、送付されたIDとパスワードを用いてログインして下さい。これにより、定期大会の全ての分科会、パネル、記念講演、シンポジウム、総会、懇親会に参加できるようになります。なお、今回学会に参加されない会員も、学会ポータルからプログラムおよび各発表等の要旨および報告ペーパーを閲覧することができます。

また、座長向け、報告者向けの事前レクチャーを各1回ずつ開催しますのでご参加ください。参加できない方のために録画したものを学会ポータルに掲載します。参加あるいは閲覧のどちらかをおこなっていただき、Zoomの扱い方を各自で必ず確認してください。

い。事前レクチャーの開催日程ならびに録画データのアップ日程については後日お知らせします。一般参加の方々には、Zoomの基本的な使い方を説明したマニュアルを、「第42回定期大会」ポータルからダウンロードできるようにします。

以下、申し込みに当たって、個々の注意点を述べます。

2. 個別の研究報告

従来と同様、個別報告にはそれぞれ討論者がつきます。希望する討論者の氏名（複数可）を記入するようご協力ください。なお、討論者への正式な依頼と最終的な選定は大会実行委員会が行います。報告者は日本ラテンアメリカ学会の会員に限ります。未納の会費がある場合はすみやかに納入のうえお申込みください。個別発表はテーマ等に基づき大会実行委員会の方で分科会に分け、分科会ごとに座長を置きます。報告者は、それぞれの討論者に時間的余裕を持って報告資料を送ってください。座長は、分科会の全討論者が報告資料を受け取ったかどうかを確認しておいてください。オンライン会議であることを踏まえ、ハンドアウトの配布を希望される場合は事前に用意し、大会実行委員会（ajeltaikai2021#gmail.com（#を@に変更する）宛に、件名を「配布資料提出（氏名）」としてお送りください。これらは定期大会ポータルに掲載するプログラムからダウンロードできるようにしておきます。

3. パネルの申込み

パネルの司会者と討論者は、パネル代表者の責任のもとで決定することになっています。必ず全登壇者の同意を取り付けたうえでお申し込みください。パネルの持ち時間は120分です。

登壇者は日本ラテンアメリカ学会の会員であることが必要です。ただし、パネルの趣旨にあった構成に不可欠な場合は、非会員の登壇も認められます。非会員を加える場合はその理由を記載してください。なお、パネルの代表者は会員でなければなりません。

4. ポスター発表

発表者は、事前にパワーポイントを使ってプレゼンテーション（pptまたはpptx形式）を作成し、大会実行委員会（ajeltaikai2021#gmail.com（#を@に変更する）宛に、件名を「ポスタープレゼン提出（氏名）」としてお送りください。プレゼンテーションは画像及び録音を含むものとし、全体で15分に収まるようにしてください。なお、画像はご自身で撮影されたものに限り、プレゼンテーションは、大会プログラムからアクセスできるようにします。同時に質疑応答用のビジネスチャットツールSlackを設置し、発表者に対する質疑応答が行えるようにしてあります。ポスター発表に関しては、大会後も5日間大会ポータルからアクセス出来るようにします。

5. 懇親会

今回の懇親会は、Zoomの「ブレイクアウトセッション」を利用して行います。詳細については、後日お知らせします。

6. 総会

Zoomを用いてオンラインで行います。総会については、大会参加申し込み用とは別のGoogle Formsを通して、参加・不参加を伺います。総会成立定数を確保するため、総会を欠席される方は、大会の参加・不参加にかかわらず、必ず総会出席確認用のGoogle Formsで「委任状」の欄をクリックしておいてください。

今回の申し込みから大会までのスケジュールは、現段階では以下のとおりです。

- ・2021年1月6日（水）：報告申し込みの締切。
- ・2月初旬：報告申し込みの採否通知。
- ・3月26日（金）：報告要旨集（電子媒体）の原稿の締切。大会実行委員会（ajeltaikai2021#gmail.com（#を@に変更する）宛に、件名を「報告要旨提出（氏名）」としてWord文書の形式で提出（書式等の詳細は追ってご連絡します）。分科会、パネル等にまとめられたものは、大会ポータルにアップロードします。また「報告ペーパー」を事前に提出していただきます（詳細については後日お知らせします）。
- ・5月31日（月）：定期大会一般参加および総会参加申し込み締切。

なお、大会の詳細などに関しては今後変更される可能性があります。

【実行委員会連絡先】

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学教育学部第1研究棟317号
藤掛洋子研究室気付
日本ラテンアメリカ学会
第42回定期大会実行委員長
藤掛洋子（ajeltaikai2021#gmail.com（#を@に変更する）

大会実行委員

山崎圭一・大越翼・小林貴徳

3. 研究部会について

〈東日本部会〉

コロナ禍にあって、初めてのオンライン開催となります。参加希望の連絡があった会員のみ、Zoom招待URLを送りますので、以下の要領でご登録ください。

【開催日時】2020年12月12日（土）

13:30～17:00

【発表者、発表題目および討論者】

1. パネル「“性的マイノリティ”の権利保障に関する6か国の現状」

発表者

畑 恵子（早稲田大学招聘研究員）「研究の目的／まとめ」

磯田沙織（神田外語大学）「ペルー」

近田亮平（アジア経済研究所）「ブラジル」

松久玲子（同志社大学社外研究員）「ニカラグア」

尾尻希和（東京女子大学）「コスタリカ」

上村淳志（高崎経済大学非常勤講師）「メキシコ」

渡部奈々（獨協大学非常勤講師）「アルゼンチン」

討論者：浅倉寛子（Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social）

2. 発表者：舩方周一郎（東京外国語大学）

発表題目：「2020年ブラジル地方選挙・速報—コロナ禍の現状と課題」

討論者：岸川毅（上智大学）

3. 発表者：新谷和輝（東京外国語大学大学院博士後期課程）

発表題目：「チリにおける『サード・シネマ』の展開」

討論者：交渉中

【参加申込先】

参加を希望される会員は、12月10日（木）までに以下のアドレスに参加登録（Zoom URLのお送り先）をお願いいたします。

ajelkozaki # gmail.com（#を@に変更する）

東日本研究部会担当理事

岸川毅／狐崎知己

〈中部日本部会〉

中部日本研究部会では、以下の日程で今期第一回研究会を開催する予定です。

【開催日時】2020年12月20日（日）

14：00～17：00

【開催形態】Zoomによるオンライン開催

プログラムの詳細確定後、開催案内の配信時に、参加希望についても併せて申し込みを受け付ける予定です。（Zoom招待URLは事前に参加希望をお伝えいただいた会員にのみ、12月中旬にお知らせいたします。）

実り多い活発な議論の場となりますよう、皆さまの積極的なご応募とご参加をお待ちしております。よろしく願いいたします。

中部日本研究部会担当理事

牛田千鶴／渡部森哉

〈西日本部会〉

以下の要領で、2020年度第1回の研究会をオンライン開催いたします。当初予定していた11月7日から変更となりましたので悪しからずご了承ください。

【開催日時】2020年12月19日（土）

14：00～17：00

【発表者、発表題目および討論者】

1. 発表者：遠藤健太（フェリス女学院大学）

発表題目：「2020年コロナ禍中に迎えたメキシコの国勢調査」

討論者：中沢知史（南山大学）

2. 発表者：神崎隼人（大阪大学大学院）

発表題目：「ペルー領アマゾンにおける開発と先住民の抵抗—ポリティカル・オントロジーの視点から—」

討論者：岡田勇（名古屋大学）

【参加申込先】

参加を希望される方は12月15日までに以下のメールアドレスにご連絡ください。後日Zoom招待URLを送信いたします。

lasamericaszennogmail.com

（#を@に変更する）

禪野美帆

西日本研究部会担当理事

鈴木紀／禪野美帆

西日本研究部会運営委員

鳥塚あゆち

4. 第25期日本学術会議会員の 任命拒否問題について

内閣総理大臣による日本学術会議会員の任命拒否問題および一部メディアを巻き込んでの政府による情報操作の試みは、学問と言論の自由、法治主義を脅かすゆゆしき事態といえます。このため、当会でも理事会で対応を審議し、以下の声明を作成し公開するとともに、内閣総理大臣宛てに郵送したことをご報告します。また、JCASAの共同声明 (<http://www.jcas.jp/asjcasa/jcasa-activity.html>) および人文・社会科学系学協会 (http://cogpsy.jp/wp/wp-content/uploads/201106_kyoudouseimeai.pdf) の共同声明に参加しています。今後も他学会らと連携しながら、抗議を続ける予定です。ご理解とご協力をお願いいたします。(理事長)

第25期日本学術会議会員の任命拒否問題 に対する緊急声明

第25期日本学術会議の新規会員として

推薦された候補105名のうち6名が内閣総理大臣により任命されないという異例の事態が生じました。政府からその理由を説明しようとする真摯な対応のなされぬ一方で、問題の本質から外れた言説やデマの流布を通じて政府の説明責任を否定するような動きがみられます。

これは、学問の自由、言論の自由さらには法治主義に抵触するゆゆしき事態です。こうした恣意的な介入を認めていくなれば、当会の会員がこれまでのように自由にラテンアメリカの社会現象や集団、文化を研究し、その成果を様々な場で公表し、それを通じて日本とラテンアメリカの相互理解と発展とに貢献することが困難になっていく恐れがあります。日本ラテンアメリカ学会は、日本学術会議の協力団体として、政府に対し6名の任命を拒否した理由の開示と彼らの任命とを強く要請します。

2020年10月18日

日本ラテンアメリカ学会理事会

5. 新刊書紹介

山越英嗣

『21世紀のメキシコ革命 オアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌』
春風社、2020年（書評者：大津若果 東京大学非常勤講師）

メキシコ南部のオアハカ州で2006年に起きた州政府への抗議運動では、警官隊との衝突が起こった要所のバリケードに、「バリケードの聖母」と呼ばれるグアダルupesの聖母を模したポスターが掲げられた。ステンシルや木版画の技法を用いて、そのほかにも、街のあちこちの壁にデモ行進をテーマとした図像が描かれた。オアハカ州知事の辞任を要求した、この抗議の背景には、外資系企業の誘致や観光開発などの新自由主義政策を推し進めた政治への不信があっ

たのだが、この抗議運動のさなかに街の壁画やポスターを通して、オアハカのアートシーンを牽引したのは、ベニート・ファレス・オアハカ自治大学美術学部の学生たちを中心として結成されたオアハカ革命芸術家集会（Asamblea de Artistas Revolucionarios de Oaxaca、以下ASARO）だった。

ASAROのアーティストたちはコレクティボという名の組織に所属し、組織のリーダーを置かず、アサンプレアと呼ばれる合議制の集会で討議を行い、仲間と協力

して活動する。彼らの多くが農村の出身者であり、彼らの表現には先住民のアイデンティティを投影したものが多く。本書は、こうしたアーティストたちへのインタビューや現地オアハカの調査から得た豊富な資料に基づいて、ASAROの活動を丹念に描いた一冊である。

博士論文をもとに整理された本書のなかで指摘されるのは、かつて1920年代に描かれた壁画が国の主導で提示され、上意下達の形であったのに対して、ASAROは、メキシコ革命期に活躍した人物を題材にしても、ポップなイラストやパンクロックといったユースカルチャーを組み合わせ、表現手段を刷新し、同じ題材にむしろ国や州政府に対する抗議という異なる意味を与えることである。それはやがて海外のキュレーターや編集者の関心の対象となり、ASAROも時には判断を保留しながら、海外の展覧会への参加や、美術館での作品展示へ活動の場を広げていく。彼らの活動に関する、こうした情報の発信によって、抗議運動が下火になるなか、逆に国内外のASAROの知名度が上昇し、州政府のオアハカ文化芸術事務局から壁画制作の依頼や奨学金の給付などの支援がスタートする。本書は、このように抗議運動に端を発し、彼らの作品が受容される経緯を含めて精緻に追跡している。

なかでもASAROのアーティストたちが美術学校で師事した日本人画家の竹田鎮三

郎から受けた影響に著者が着目したのは興味深い。竹田は愛知県瀬戸市の農家に生まれ、東京藝術大学を卒業した1957年には、炭鉱労働者をテーマにした版画作品『労働者』で第一回東京国際版画ビエンナーレ展に入選した。この木版画が画家の北川民次らの目に留まり、北川の影響もあって竹田はメキシコに渡航したのち、1979年からオアハカに移住し、ベニート・ファレス・オアハカ自治大学美術学部で教鞭をとった。美術教師としての竹田は木版画をASAROに伝授した。木版画は安価な材料で制作でき、複製が可能なおかげから、抗議運動に積極的に導入された。

とはいえ、本書で述べられるのは、そうした技術的な側面だけではない。筆者は長時間にわたるインタビューから、彼らは竹田を通してオアハカという主題を「再発見」と推測する。つまり、ASAROが変容する要因には海外の展覧会への参加やインターネットによる外部からの目があったわけだが、ASAROを生み出した要因にも、日本人の画家がオアハカの地域固有の文化を見出したという外部からの視点が少なからず入り込んでいたのである。ASAROの作品の文脈においては、複数の視線が交錯している。それはオアハカの農村の若者たちとASAROが開くワークショップに引き継がれていることを本書は報告している。

村川淳

『浮島に生きる アンデス先住民の移動と「近代」』
京都大学学術出版会、2020年発行、408頁（紹介者：相田豊 東京大学）

本書は、ペルー・プノのティティカカ湖水域に浮島を作って住む人びとの生活動態について、彼らが直面する「近代」との緊張関係を焦点を当てながら記述した地域誌である。

浮島での生活は、常に動的な性格を帯びる。トラで作られた浮島は容易に分割が可能であり、しばしば住民の仲違いなどをきっかけにして、浮島は物理的に分断される。そうして、その都度浮島は離散した

り、移動したり、再接続したりしながら社会関係を再構成し続けている。

浮島の先住民たちは、湖岸での取引のためにティティカカ湖を縦横無尽に移動する。さらに、商売や結婚式のためとなれば、ボリビアの溪谷地帯まで移動したり、はたまたペルーの海岸地方の地方港に行って家を持ったりもする。彼らは移動先で、湖岸先住民、環境省、プノ地方政府、プロテスタント教会など、多様なアクターと交渉する。浮島の人びとのまとまりはこのように非常にゆるやかで、かつ動的であり、調査者を含む外部の人間に単一の視点から鳥瞰することを許さない。

筆者のインスピレーションは、このまとまりのなさこそ「矛盾に満ちた「近代」を生き抜いてきた先住民の歩みの基底」(p.xi)ではないか、という点にある。筆者によれば、このまとまりのなさは、植民地支配や新自由主義といった大きな潮流に対して常に警戒心を持ち、一定の距離を取りながら生きてきた人びとによる抵抗の振る舞いだというのである。本書はこうした前提に立ち、ペルー国家の環境保護政策や徴兵制度、観光客が持ち込む貨幣経済などに対し、人びとがもがきつつも飲み込まれていく過程を記述する。

本書が優れているのは、何においてもまず、多様な資料をもとにこれら近代化とその対抗のあり方を実証的に記述することに成功している点だと言える。筆者は行政文書などの歴史資料を丁寧に渉猟しつつ、浮島の人びとの口述インタビューを組み合わせることによって、ティティカカ湖水域のマイクロヒストリーを記述することに成功している。また、トトラの生態と資源利用などに関する綿密な記述が行われている箇所は農業経済に強みを持つ筆者ならではの

記述になっているだろう。クスコやアヤクーチョなどの南部ケチュア語圏がとかく取り上げられがちなペルー地域研究において「ティティカカ湖水域」という独自のフィールドを提示している点で本書の果たしている功績は大きい。

ただ、一方で、評者が読み進める上で疑問が残る点もあった。筆者は一貫して、マクロな政治経済構造と、それに抗ったり取り込まれたりする浮島先住民、という構図を用いている。しかし、こうした構図はともすれば多様な価値観と生活実践を持つ人びとの生を「近代化」という近代の側からの単一のストーリーの中に配置しているようにも思われた。もちろん、植民地主義や新自由主義の中での先住民の主体性や柔軟さを強調しすぎる傾向にあるかねての人類学研究に対して、構造的権力の強さを再確認したかったという筆者の主張は分かるが、むしろそうした近代化論自体を相対化して、先住民の人々の側から見た地域史のストーリー、彼らの言葉でこそ語られる移動の論理についてさらなる記述があると、ティティカカ湖の中にたゆたう浮島に生きることを意味を「南」の側から捉え直す(p.370-371)という本書の目論見をより明確にすることができたのではないかと思う。

とはいえ、以上の論点は文化人類学を専攻する評者自身の個人的な関心から来るものであり、既に述べたような本書の優れた地域誌としての意義を何ら減ずるものではない。本書をきっかけに「ティティカカ湖水域」というフィールドがアンデス地域研究を越えて注目され、そこに生きる人びとの生について理解と議論が深まることを願ってやまない。

石田智恵

『同定の政治、転覆する声 —アルゼンチンの「失踪者」と日系人』
春風社、2020年（紹介者：山越英嗣）

「アルゼンチンの歴史は同一性の問題に貫かれている」（p11）。印象的な書き出しで始まる本書は、1976年から1983年までの軍政が確立したテロルの体制と、その体制をなした「強制失踪」を事例として、「白人国家アルゼンチン」というステレオタイプを揺るがす日系失踪者とその親族たちの奮闘を描くものである。

本書は二部構成を取る。第Ⅰ部「『国民再編過程』と『回復』の運動」は、アルゼンチンの1970年代がいかなる時代であったかを探求する。当時はアルゼンチンにおける左翼（社会主義・共産主義）革命運動の最盛期であり、それに対する国家の弾圧が徹底した形で行われ、その結果、大量の「失踪者」を生み出した時代であった。その契機となったのは1976年の軍事政権が掲げた「国家再編プロセス」であった。81年まで大統領に就いた陸軍総司令官のホルヘ＝ラファエル・ビデラは、ペロニズム・社会主義・共産主義思想拡大の阻止、西洋的価値観とキリスト教的倫理の回復、国家の安全保障の基盤確立などを目標に掲げ、市民の政治・文化活動を著しく制限した。そして、彼は公教育やマスメディアのプロパガンダを通じた心理的作戦や残虐な暴力に訴えた弾圧を行った。反体制とみなされた者は「国家転覆分子」として拉致され、秘密裏に監禁・殺害された。しかしながら、その事実は隠ぺいされ、ただ「失踪（行方不明）」として扱われた。その多くは非武装の政治活動家であった。誰が消されるべきであるかは明らかでなく、人びとは恐怖の只中に置かれた。そして、しだいに隣人同士やコミュニティ内に相互不信、相互猜疑、相互監視がゆきわたり、国家によ

る支配体制が確立していった。

ここで注目すべきは、たとえ誰かが拉致され秘密裏に殺害されていても、その人物の身分登録は抹消されないことである。「失踪者」は、物理的に存在しなくなる一方で、法的事実として存在し続けるという不安定な状況に置かれる。著者はこれを、哲学者アキユ・ンベンベが提示した「死権力・死政治」概念に引き寄せて考察を行う。そのうち「死権力」は、人間の死なせ方や死の効用に関心を注ぎ、死を管理し操作することで人口を支配する [Mubembe 2003]。すなわち、どの人間をどの順番で殺すかを公言する権力者のことばに聞き取られるのは、「死権力」の呼びかけということになる。そして失踪者は、時間が経てばたつほど生存の可能性が薄れていく一方で、死者として弔うことすらできないままその個人の存在が宙ぶりにされる。

このような困難のなかで、国家に対する告発や抵抗を始めたのは、失踪者の母親たちであった。戒厳令下に集会とみなされないために、彼女たちは「五月ピラミッド」の周囲をゆっくりと円を描くように歩き続けた。母親たちの活動は、自分たちに生じている苦難は私的なものではなく、国家に起因する公共性を帯びたものであることを暴露し、抵抗の可能性を開いた。

失踪者の弔いの仕方として著者は、スペイン語の *reivindicar* という語に注目する。著者によれば、この語は名誉・正統性の回復の達成というよりはむしろ、名誉回復を訴える行為のパフォーマティブな側面を強調する。

第Ⅱ部「国家テロリズムとマイノリティの闘い—日本という出自」では、70年代

の政治的な「記憶」の問題を日本人移民に出自をもつ人びとの視点から考察している。

日系失踪者の「記憶・真実・正義」は、他の移民出自をもつアルゼンチン人たちと同じではない。当時のアルゼンチンでは、ヨーロッパ移民以外は歓迎されていなかった。なかでも日本人移民は、「アジア系マイノリティ」であった。小集団ゆえに「ハポネス」は脅威とはみなされてこなかったが、その背景には、彼らが排除を恐れ、細心の注意を払って生活をしてきたことがある。そして彼らは、真面目、正直、清潔、従順といった肯定的なイメージを確立した。しかし、「日本人は全部善人で素晴らしい人種であるはずだ」というステレオタイプは、逆に「ハポネス」を抑圧する言説ともなりうる。そのため「ハポネス」のイメージは「対外国家転覆活動戦争」における敵である「転覆分子」からもっとも縁遠いものとして想像された。著者は、日本人の顔をもちながらミリタンテであるという

ことは、ハポネスという出自、それを示す顔によって分類されるナショナルな境界を攪乱し、「出自」に結びつけられた個人的な問題を社会につきつける政治となると看破する。

著者によれば、現在のアルゼンチンにおいて、多様性は尊重すべき価値として浸透している。そしてその変容は、「日系ミリタンテ」になった人々と、「日系失踪者」という「不在の存在」を回復し続ける運動が、ひとつの契機となったのではないかと結ぶ。

本書は「強制失踪」という「重い」テーマを扱ってはいるものの、著者による丁寧な聞き取り調査のおかげで、現地で生きる人びとの生のぬくもりや、いとおしさを感じさせる良質な民族誌となっている。文章にはやや硬さが残るが、アルゼンチン研究者のみならず、広い読者に手にしてもらいたい優れた著書であることは間違いない。

Mbembe, Achille 2003 “Necropolitics” Trans. L. Meintjes. *Public Culture* 15 (1): 11–40.

6. コロナ禍における現地滞在記

ロックダウン：

隔絶されたペルー地方都市に広がる地平

村川淳（京都大学農学部教務補佐員）

より慎重な判断が必要だったのかもしれない。3月中旬、筆者は南米大陸へと赴いた。春の休暇期間以外、調査時間を確保することが難しかったこと、目的地ペルーの当時の感染者数が微々たるものであったことが背景にあった。

現地到着後、数日を過ごした3月15日、国家非常事態宣言が発令される。日没後に行われたマルティン・ビスカラ大統領の緊急会見では、翌日23時59分からの国境封鎖、郡

境を跨いだ移動も原則禁止との周知が行われた。チャーター便の案内を見送りながら、地方都市チンボテでの暮らしが始まった。当初2週間程を予定していた滞在は、最終的には7月上旬にまでずれ込むことになる。国内感染者数が急増し、移動制限が継続された時期である。小論においては、ペルー北部海岸地域での生活を素描しながら、幾つかの論点を書き留めておきたい。

チンボテに訪れるのはこれが初めてだった。滞在中の安宿は、非常事態宣言発令に伴い、即閉鎖となる。辺りの宿も軒並み営業中止だ。ラテンアメリカ的な封じ込め政策が、われわれの常識では想像もできない

強権的・場当たりのなものであったことは言うまでもない。行き場もなく途方に暮れるのは筆者がごとく異邦人ではなかった。日本での就労経験のあるペルー人と偶々知り合い、身を寄せることができたのは、僥倖と言うよりなかった。

幸い最低限の買い物は許されている。様子見に市街地へと繰り出せば、そこで目にするのは、もぬけの殻となった街並みだ。軍人・警官たちが闊歩する。外にたむろする人びとの拘留を見かけることも度々だった。

思い返せばチンボテは、工業化政策に伴いアンデス地域から大量に移民が流入し始める20世紀中葉までは、砂漠の寒村に過ぎなかった。太平洋戦争中、ペルー北部地域の諸資源に目をつけたアメリカ合衆国が、マラリアなど熱帯病の制圧拠点を設けたことが前史となる。

人びとが追いやられ、再び静けさを取り戻した広漠にて。感染症との攻防が人びとの命運を左右してきたラテンアメリカの歴史、蚊の撲滅のため埋め立てられた沼沢地を思い起こしながら日々を過ごすことになった。そして現下、そこを領有し、交渉を迫るのは、人びとの移動を統制することによって、ありもしない境界を浮かび上がらせる近代国家のエージェントなのだった。

5月下旬、南米大陸はパンデミックの世界的中心地となった。相次ぐ非常事態宣言の延長の中、重点的な隔離地域へと組み入れられたチンボテは国内的な経済活動再開への動きからも取り残された。身近なところでも、感染が疑われる人が多数出た。何かあっても十分な医療など望むべくもない。しかし、筆者が現地で体感したのは、国内感染者数84万人などといった統計数値情報（10月9日現在）、煽情的な報道ともかけ離れた日常でもあった。

そもそも、感染者が未だ確認されていな

い地方都市にあって、非常事態宣言発令の意義を理解すること自体に無理がある。本格的な統制が目論まれた最初の1か月程においても、管理のほつれを見つけては、人びとは街に繰り出した。生活をかけ路上の占拠を進める露天商、あるいは大道芸人たちをこの文脈に並置するは問題含みだろうか。摘発を進める官憲をやり過ごせば、あたりからは軽妙なヤジも飛ぶ。

チンボテでの生活が長くなり、友人ができれば、酒席に呼ばれることも多くなった。マスクを外し、すぐそばに腰掛けての密な時間となる。街路において、アジア人とコロナウイルスを結びつける露骨な差別を受けることもなく、管理統制が次第に緩めば、その生活は何一つ不自由のないものとなった。

筆者、そして周りに居合わせた現地の人びとに、そこそこの経済的余裕があったことも大きかろう。しかし、コロナ禍をめぐる人びとの経験が、必ずしも緊張感に塗りこめられたものでもなかったことは強調されても良い（そしてこれは、帰路、同乗したペルー人たちの表情とは対照的でもあった。日本に家族を残したまま、リマでの缶詰状態を強いられた女性たちの声には悲壮感、そして漸くの帰国への安堵も滲んだ）。

移動が制限され、特定の物理的空間に押し込められた人びとの経験は、断片的なものとならざるを得ない。コロナ禍について論じる際の、特有の困難でもあろう。

今回の滞在で少なからぬ驚きを覚えたのは、デジタル機器、そして監視カメラの急速な普及でもあった。スマホさえあれば、そのやり取りは国境線にも縛られない。今回のお世話になった一族の一人が、現在でも日本で就労していることもあって、フクシマでの暮らし向きも日々漏れ伝わってきた。

オンラインで聞き取りを行う。現地に赴くことが難しくなった研究者たちがコロナ

禍の相貌に迫るために有益な手立てには違いない。しかし、ラテンアメリカとは、私たちと隔たった遠方だけにあるわけでもない。そして、デジタル機器の販売自体が制限されていた非常事態宣言下において、そこへのアクセスが人びとの分け隔てともなってきたことも忘れてはならない。

同じ空間に居合わせる人びとすらも、異なった接続様態の中、各々の経験を積み上げる状況は一厳然たる格差構造の延長線上において一南米の片田舎にあっても着実な広がりを見せている。俯瞰的な視座を許さぬコロナ禍、先の見通せぬ状況の只中であって、試されているのは、諸経験をつなぎ合わせる想像力だろう。現地にいあわせようと、そうではなかりうと、人びとを分断し続ける諸力を、語りの断片から手繰り寄せることから始めねばならない。今回の騒動を一過性の学的流行として終わらせることなく、日本とラテンアメリカのつながりを捉え返す契機とする必要性を感じながら、帰途についた。

COVID-19とメキシコシティの若者たち

渡邊翼（上智大学大学院）

2019年8月から2020年8月までの約1年間、メキシコ大学院大学に研究滞在した。COVID-19が感染拡大する中で、調査対象者との関わりを通して、私が感じたことや考えたことをまとめてみたい。

2020年2月28日、朝の7時頃だ。私は乗合バスに乗り、大学へ向かっていた。運賃の7ペソ（約35円）を支払い椅子に座る。「今日も渋滞か」と心の中で呟き、暇つぶしにラジオニュースを聴いていた。するとラジオパーソナリティが「¡Atención, atención!」と、興奮気味に速報を読み上げた。そのニュースは、メキシコ初のCOVID-19感染者確認に関する内容だった。大学に着くと、周りは

COVID-19の話題で持ち切りだ。ウィルスを楽観的に捉える学生もいれば、そうでない者もいた。私の周りでは、楽観的に捉える人の方が多い印象だった。念のためと思い、マスクやジェルを購入しようと薬局に行ったが、どこも売り切れ状態だった。友人からマスクを譲ってもらい、当分は乗り越えた。

感染が拡大する中で、観光業への打撃、GDPのマイナス成長、自動車の出荷台数の減少など、ネガティブなニュースばかりが飛び交った。それはおそらく世界共通だろう。特に私が危惧したのが、若者の失業率増加だ。なぜなら研究滞在の目的が、アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール、メキシコ大統領政権下で実施されている、職業訓練支援プログラム（El Programa Jóvenes Construyendo el Futuro: PJCF）に参加する若者へのフィールドワーク調査だったからだ。同プログラムは、労働市場への参入を目的に、230万人の就業と就学に従事していない若者へ、1年間の職業訓練を実施する。私が調査対象とした若者は、2020年7月までにプログラムを終えた人が多く、コロナ禍のなかで、職を獲得する必要があった。こういった未曾有の危機において、各企業は労働経験の少ない若者をクビにしていく。調査した若者は、社会・経済的に厳しい状況にあった。ただでさえ不安定な生活を送る中で、パンデミックが拍車をかける。そうした若者の1人レオポルドは、プログラムを修了し母親と妹の3人で暮らしている。父と母は離婚し、母は女手一つで2人を育ててきた。電話をしてみると、彼は自身の家庭状況を語ってくれた。

うちの母親は前にも話したけど、ベビーシッターだろう。コロナ禍でシッターが働けると思う？それは無理だよ。この前なんて、ウィルス持ってくるかもしれないから、

少し子守をやめましょうって、雇い主が
言ってきたって、母親が。

多くの元訓練生の家庭は、レオポルドのよ
うな状況だった。メキシコ滞在中、マス・メ
ディアが、インフォーマルセクターの増加、
失業率や貧困率の増加を日々報道していた
が、調査していた元訓練生はそういったカテ
ゴリーに属しているのだろうと想像していた。

しかしそのような中でも、元訓練生の多く
は自身の道を何とか切り開こうとしているこ
とを記したい。SNSを用いて輸出業のビジネ
スを展開する元訓練生、プログラムで支給さ
れた給付金で大学受験のための講座を受講し
試験を突破した若者、職業安定所に通い職の
獲得に成功した元訓練生、家業（食料品店、
鍛冶屋や金物屋）を手伝いながらも労働市場
への参入を窺う若者、などなど。インタ
ビュー調査を実施して気がついたのは、苦境
に立たされながらも、自身の目標を達成した
り、目指したりしている若者たちの姿だった。

翻って私はCOVID-19が感染拡大し、満
足にフィールドワーク調査はできなかつた。
加えて、彼ら・彼女らに中々会えず日本
に帰国したのだが、1人の元訓練生が以
下のことを話してくれた。

対面でインタビュー調査とか実施して、
修士論文を書きたかったのは知っている
よ。とても残念だと思うし、思うように
データも取れないんでしょ。でも、あるも
のだけでどうにかしないと。私たちは、
いつでも自分の家庭状況やプログラムの
感想とか、色々話すから。あなたはしょ
ぼくれないで、さっさと修論書きなよ。

的を射た指摘で少々バツの悪い思いをし
たが、こうして「お節介な」調査対象者に
巡り会えたのを幸運に思う。生来私はクヨ
クヨする性格であり、COVID-19の到来に

とても参っていた。変な話だがこうして私
は、訓練生の励ましの言葉とSNSを用い
たインタビュー調査で、現在は修論を執筆
している。お互い若者ということもあり、
感染拡大前はバーやレストランに行っ
ては、色々夢を語り合った仲だった。そう
いったことが功を奏したのか分からない
が、私の研究を気遣ってくれたのだろう。

レオポルドの語りから分かるように、
COVID-19は調査した若者に悪影響を及ぼ
している。前から不安定だった生活をさら
に不安定化している。そのような中でも、
何とか自身の進路を同プログラムで得た給
付金や労働経験で道を切り開く姿には心を
打たれる。同じ若者として、私も自身の夢
を叶えるために、日々精進するばかりだ。
コロナ収束後、彼ら彼女らの現況を尋ねに
メキシコへ行きたい。

7. 事務局から

○新型コロナウイルスに関する投稿の募集

会報では次号においても、COVID-19がも
たらす危機と社会の変容に対して会員の皆
さまが何を考え、どのように向き合われてい
るのかについての声を掲載したいと考えてお
ります。1,000～2,000字程度 of 原稿を事務局
宛て（ajel.jalas@gmail.com）にお送りくださ
い。

○マイページで会員情報の更新を

「マイページ」では住所や所属、学会か
らのニュース配信の送付先など、学会に登
録する情報を会員自らが入力できるようにな
っています。また、「マイページ」には会
員検索機能があり、会員名簿の役割を果た
しています。同じ学術的関心を持つ人を見
つけられる場であることは、学会の重要な
役割の一つです。ご自身の情報を更新して
くださいますよう、お願い申し上げます。

